
第三卷

29 走るバス

鄙びた商店街を走る田舎のワンマンバス。

30 同・車内

帰宅のバスに揺られている大悟。

女子高生が三人、べちゃくちゃと話している。

女子高生「プリクラ新しいのあったって」

女子高生「マジで？」

女子高生「今日行こうよ」

女子高生「行く行く行く」

女子高生「でも私彼氏いるから無理」

女子高生「付き合い悪いよ」

女子高生「なんで？」

女子高生の一人(A)が大悟を見る。

大悟、女子高生の視線に気づく

大 悟「……？」

女子高生、視線を友人に戻して、

女子高生「ねえねえ、あのさ、今日何か食べた？」

女子高生「食べてないよ」

女子高生「なんか匂うんだけど」

女子高生「あんたのマフラーでしょ？」

女子高生「違うし」

(A)が席を移動。

自分の臭いを気にして、手や頭など臭いをかぐ大悟。

自分に死臭がついているような気がして、周囲の目が気になる。

女子高生「違う？」

女子高生「ねえねえ」

女子高生「なーに」

女子高生「後ろの黒い服の人、臭うって」

バスのアナウンス「次は南銀座、南銀座でございます」

女子高生「まさか」
女子高生「違うかな」
女子高生「わかんない」
女子高生「でも何の臭い？」
大悟、窓の外になにかを見つけ、慌てて「次降ります」のボタンを押す。

31 銭湯・外

大悟、銭湯の前にやって来る。
大 悟「ああ……まだあったんだ」
そこは、大悟が普通っていた懐かしい場所だった。

32 同 ・ 内

入って来る大悟。
料金を払おうとするが、番台には誰もいない。
大悟が戸惑っていると、脱衣所の片隅で詰め将棋をしていた唯一の客らしき老人(平田正吉)が、
平 田「そこざ置いとけ」
大 悟「はい(しかし、銭湯代がいくらか分からなくて平田を見る)」
平 田「三百円だ」
大 悟「あ、ありがとうございます」
平田(オフ)「タオルは百円だ」
大 悟「はい」

大悟、番台に小銭を置く。

× × ×

32A

洗い場の大悟、何度も自分の臭いを嗅ぎながら体をゴシゴシ洗う。

× × ×

32B

大悟、昔を懐かしみながら湯船に浸かっている。

× × ×

堰を切ったかのように泣き始める父親。その場にしゃがみこむ。
見つめる大悟と佐々木。
父 親「本当に、ありがとうございました」
大 悟「……(礼をして)……」
佐々木、大悟の表情を見て優しく微笑む。

M16A:19”

鏡に映る自分の顔を見ている大悟。
まだ臭くないかどうか確かめている。
通用口の扉の奥から声が聞こえて来る。
山下の声「今だったら高く売れるんだって！」
大 悟「？」
通用口の扉から姿を現したのは、銭湯の店主の山下ツヤ子だ。
ツヤ子「おいは、絶対辞めないからの。ほれ、帰れ、帰れ！」
その後を追う山下猛(ツヤ子の息子)と山下の娘、詩織。
平田は相変わらず、詰め将棋に夢中だ。
驚いて見る大悟。
山 下「おいは母さんのこと想って……」
ツヤ子「そげな役人みたいな言い方、やめれ。おいは、おめえに心配されるほど、年いってねえ。(孫に～)のう、詩織ちゃん！」
詩 織「おっきいお風呂、また、入りさ来てもいい？」
ツヤ子「うん、いいよ。詩織ちゃんのためだば、ばばちゃん、ずうーと頑張るからのう！」
山下、ため息をついてふと横を見て……
大悟に気付く。
片手を上げて挨拶する大悟。
山 下「……大悟か？」
大 悟「山下……」
山 下「いつ帰って来ただや？ 連絡くらいしろて」
大 悟「あ、いや、ごめんごめん。ちょっとバタバタしてての……」
大悟、ツヤ子に向いて会釈する。
ツヤ子も大悟に気付き、
ツヤ子「あいや～、小林さんとこの……大ちゃん？」
大 悟「はい、ご無沙汰してます」
ツヤ子「あ～、ホント、久しぶりだのう……何か、すごい仕事してるって聞いたども……」
大 悟「エッ!?…あ…まあ」
ツヤ子「何だっけ、ほらあの楽器…ほれ…」
山 下「チェロ。バイオリンのオバケみたいなやつ」
ほっとする大悟。
ツヤ子「んだんだ、チェロ!(孫に)あのおじちゃんの、東京でチェロって楽器弾

やってるすごい人なんだよ」
 詩 織「ふ～ん」
 詩織にチェロを弾く物まねをする大悟。
 ツヤ子「(笑って)うちさも、あんな出来のいい息子がおっつらの」
 ツヤ子、番台へ動く。
 山 下「母ちゃん!(大悟に)悪い、今ちよっともめてての……今度、ゆっくりと、
 の!(と飲む仕草をする)」
 大 悟「ああ、またの……」
 ツヤ子「今度、ヨメさん連れてこいの。結婚してるんだろ?」
 大 悟「はい」
 ツヤ子「このバカいねえ時は静かなもんだ」
 山 下「バカを産んだのは、どこのバカだや?」
 ツヤ子「とにかく!おいは、ここを売る気はねえからの!」
 三人の会話を遮るように、平田が大声をあげる。
 平 田「あ、そうか! なるほど」
 ツヤ子「詰んだか?」
 平 田「詰んだ……はは…詰んだ詰んだ…ははは…」

33 山に沈む夕日

実景

34 大悟の自宅・1階

台所で夕食の準備をしている美香。
 階段の踊り場にある椅子に座っている大悟。

大 悟「一一」

× × ×

34A

母親の写真を見ながら考え事をしている大悟。
 今日の仕事のショックからまだ立ち直れないのだ。
 美香が夕食の支度をしながら気になって聞く。

美 香「なんかあった?」

大 悟「ううん」

美 香「じゃあ、食べよ」

その様子を見つめる佐々木。

× × ×

71B

髪をとかす大悟。
 泣きながら見ている両親。
 化粧を施す大悟。
 見守る佐々木。
 口紅を塗る大悟、その真剣なまなざし。

× × ×

71C

遺体の近くに準備された棺。
 遺族たちの手によって棺に納められる遺体。

大 悟「頭の方からゆっくりとお願いいたします」

× × ×

71D

大悟、棺の中の留男に美しいドレスを掛ける。
 泣きながら棺の中を見る母親。

母 親「留男…」

美しい留男の死に顔。

72

同・廊下

作業を終えた大悟と佐々木、部屋を退出する。
 佐々木「失礼致します」

廊下を行こうとすると、留男の父親がいる。
 立ち止まる二人。

父 親「ありがとうございました」

一礼する父親。
 礼を返す二人。

父 親「……留男が、ああなってから、いつも喧嘩ばかりで……あいつの
 顔、まともに見たことはありませんでした。だけんど、微笑んでいる顔
 を見て思い出したんです。ああ、俺(おい)の子だのう。女子(おな
 ご)の格好してたって、やっぱ、あいつは俺の子だのうって……」

と、白子を食う佐々木。
佐々木「う～ん…これだっでご遺体だよ」
大 悟「……」
佐々木「生き物は生き物を食って生きている。だろ？(周囲の植物を見て)こいつらは別だけど」
大悟、植物と佐々木を見る。
佐々木「あ～…死ぬ気になれなきゃ、食うしかない。食うんなら、旨い方がいい」
大悟、漠然とだが佐々木のが分かる。
白子を見つめる大悟、いきなり白子にかぶりつき、食う。
佐々木「旨いしろ」
大 悟「旨いすね」
佐々木「旨いんだよな、困ったことに」
二人、無言で残りを食べる。

画面 OL

70 冬の庄内平野

降りしきる雪の中、庄内平野の田舎道を一台の古いライトバンが走っている。(オープニングの場面につながる)
大悟M「東京から山形の田舎に戻ってもうすぐ二ヶ月。思えば、なんともおぼつかない毎日を生きてきた。僕は、本当にこの仕事でやっていけるのだろうか」

71 民家(菅原家)※S#4と同じ家

ご遺体(留男)の白布を外す。
納棺の準備をしながら、大悟と佐々木が話をしている。
佐々木「やってみるかい？」
大悟、しばらく考え、
大 悟「はい」

× × ×

71A

遺族を前にして汗をかきつつも一生懸命に着付けを行う大悟。

大 悟「よし」
席に着く大悟。
美 香「食べよ、食べよ」
冷蔵庫を開けて、美香が運んで来た料理は……
美 香「お隣のね、藤井さんにいただいたの」
大 悟「うん」
美 香「今朝つぶしたばかりだから、すっごく新鮮。お刺身でもいける、って」
皿に乗った生々しい鶏肉。鶏鍋である。
それを見た瞬間、大悟は吐き気をおぼえる。
鍋の中身を確認する美香。
美 香「どうかな～ もうちょっとかな」
大悟、我慢できなくなって、台所の流し台まで走る。
美 香「ちょっと……」
そして嘔吐する。
美香、心配そうに背中をさする。
美 香「大丈夫？」
水を出して口をゆすぐ大悟。
美 香「大丈夫？」
美香、大悟が落ち着いてきたのを確認して、水道の蛇口を閉める。
大悟、おもむろに美香の腕を掴む。
美 香「ん？」
その手を自分の口元に持っていく大悟。
美 香「?どうした？」
青ざめた顔で振り返る大悟。
美香を見つめ、その手を自分の頬にあてる。
美 香「……？」
大悟、自分の生を確認するかのよう美香を抱き締める。
美香のあたたかい温もりと感触を感じる大悟。
美 香「どうしたの？」
大悟の息づかいが荒くなって来る。
膝き、美香を抱きしめる大悟。
美香の体をまさぐる。
美 香「大ちゃん、何か、ヘンだよ」
大悟はさらにジーンズファスナーを開け、死から逃避するよ

うに、性の交わりを求める。

美 香「ちょっと!ちょっとヤダ大ちゃん…ちょっとね、恥ずかしい!」

大 悟「美香…」

美 香「こんなところで恥ずかしいよ……」

自分の中の不安をかき消そうとしている大悟、その勢いは止まらない。

美 香「大ちゃん…」

美香の体をまさぐりながら、立ち上がり、再び抱きしめる。

美 香「ねえ、ちょっと…」

大 悟「美香……美香……」

いつもと違う大悟を、美香は受け入れる。

35 同・二階

真夜中の寢室。

大悟と美香、布団に入っている。

美香は深い眠りについているが、大悟は眠れない。

大悟M「一体自分は、何を試されているのだろう……」

36 同・一階

暗がりの中、ぼつんと座っている大悟。

大悟M「母を看取ってあげられなかった罰なのか?……この先、どうなっていくのだろう?」

× × ×

小さなライトがついて、テーブルの上にチェロが置かれる。

大悟M「そう思ったら、なぜか、チェロが弾きたくなった。記憶を巻き戻しながら、ただ、チェロが弾きたくなった」

カバーのファスナーを開ける大悟。

出てきたチェロ、それは……子供用のチェロだ。

大 悟「は～…小さい…」

懐かしそうにチェロを触る大悟。

弦は緩んでいるが、音は出せそうだ。

大悟、階段を見上げ、意を決して上って行く。

8 同・三階の佐々木の部屋

中をのぞく大悟。

緊張しながらドアを開ける。

大 悟「失礼します」

窓外には雪が降っているが、部屋の中は熱帯の植物が一杯で、さながら温室のようだ。

食事の支度をしている佐々木。

佐々木「入って」

大 悟「はい」

大悟、佐々木のほうへ。

佐々木「飯どうしてる?」

大 悟「え?」

佐々木「カミサン、まだ戻ってないんだろ?」

と、大悟用のお茶を入れてテーブルに置く。

大 悟「は、はい……」

佐々木「食ってけよ。オレの方がうまいぞ、たぶん」

佐々木、自分の向かいの席に大悟の皿と箸を置く。

大悟、ゆっくりとその席につく。

佐々木「さ、やろっか」

と、テーブル中央の墨で焼いている白子の焼き加減を見る。

大 悟「何ですか、これは?」

佐々木「河豚の白子。炙って塩で食うとうまいんだ」

佐々木、白子を取って大悟と自分の皿に乗せる。

大悟、部屋に飾られた額の写真が気になっている。

佐々木、白子に塩をかけながら、気づいて、

佐々木「女房だ。9年前にな、死なれちまった」

大 悟「……」

佐々木「一夫婦ってのは、いずれ死に別れるんだが、先立たれると辛い。綺麗にして、送り出した。オレの第一号だ」

大 悟「……」

佐々木「それ以来、この仕事してる」

大 悟「……」

佐々木「これだってさ、」

加湿器

父 「うわーっ！」
 まわりの人々は必死で二人を制する。
 だが、父親は尚も少年を殴ったり、蹴ったりする。
 おじさん「やめれ!やめれ!やめれ!やめれ!」
 父 「うわーっ！」
 この状況にいたたまれない大悟。
 やっとのことで父親を離すおじさん、少年たちに向かって、
 おじさん「オメェだ!帰れ!」
 静まり返る室内。
 おじさん「オメェだのせいでミユキが死んだのは違わねえだろや!!」
 少年たち「……」
 おじさん「オメェがた、償えんのか、あ?(大悟を指して)一生あの人みてえな
 仕事をして、償うか、あ?」
 大 悟「……」
 少年A(オフ)「すいません・すいません!」
 激しく泣く父親と母親。

67 NKエージェント・内

ストーブの上に置かれた薬缶に水滴がついている。
 上 村「社長、悲しむだろうなあ」
 大 悟「一え?」
 上 村「あなたのこと、気に入ってたから」
 大 悟「そうなんですか?」
 上 村「そうよ。創業以来、初めての社員だもん」
 大 悟「その割には、面接とかいい加減でしたよね」
 上 村「いつも直感で動くの、あの人は。あなたを見た瞬間、ピンと来たみたいよ」
 大 悟「そんなこと言われても……」
 上 村「悪いけど、辞めたいなら、直接社長に言って」
 上 村、上を指して、
 上 村「今、上にいるから」
 大 悟「……」
 大悟、上を見上げる。

68 同・階段踊り場

大 悟「?」
 チェロを引っ張りだそうとすると、楽譜に包まれた何かがある。
 その包みを開くと……
 それは石だ。
 どこにでも転がっていそうな石。
 大悟、ゆっくりと握りしめる。
 その石は、冷たく、ゴツゴツしていて、どこか不器用な形をして
 いるけれども、記憶の底をくすぐってくる。
 × × ×

36B

床についた無数の穴の跡。
 そこにチェロのエンドピンをあてがう。
 大悟、小さなチェロを構え、そして演奏を始める。
 表面に塗ってあるニス的大部分がひび割れていて、鈍い輝きを放つ。
 チェロを弾いているうちに、幼い日の記憶が断片的によみがえってくる。
 大悟の姿が、やがて……幼い頃の姿に変わる。

37 回想 1

喫茶店でチェロの練習をしている幼い大悟。
 その傍らには、父親と母親がいるが、顔は見えない。
 父親の影が、幼い大悟に優しく付き添っている。

38 回想 2

〇歳の大悟。
 初冬の寒い夜。吐く息が白い。
 使い古したアルマイトの洗面器が悲しく見える。
 それでも自分はとても楽しい。
 父親と母親の手をしっかりと握り、ブランコ遊びをしながら親子三人で、銭湯に入っていく。

39 回想 3

満天の星空。
父親は一生懸命、河原で何かを探している。
大悟も一緒になって探す。
二人が見つけたものは石だ。
父親のはゴツゴツした大きな石。
大悟のは丸くて小さな石。
それを交換する父親と大悟の姿を、母親が見ている。
だが、父親の顔はぼやけてわからない。

40 大悟の自宅・一階

チェロを演奏している大悟。

41 同・二階

布団の中の美香。
もれてくるチェロの音色を聴いている。

42 同・1階

昔を思い返しながらチェロを弾き続ける大悟。

43 庄内平野

白鳥が飛来している。

46 月光川

月光川に架かる橋の上に大悟がいる。
会社に行こうという気が起こらないのである。
大悟、ぼっと川の流れを見つめると、キラリと光るものを見つける。よく目を凝らすと、それは鮭だ。
日本海からやって来た鮭が、遡上しているのだ。
一方でその横を、上流で役目を終えた半死の雄が、口をプカプカさせながら流されていく。
生と死が交差する皮肉な光景である。

66 民家・中(加藤家)

制服姿の女性の遺影がある祭壇。
故人に化粧をしている大悟、最後に口紅を紙で押さえて、大悟の反対側に座っている母親に、終わりました、の会釈をする。

母 「……違う」

大 悟「…はい？」

母 「うちの子は、こんなんでもねえ」

大 悟「……」

母 「髪の色も違うし、全部違う!ミユキはあなのよ!」

遺影の清楚な姿を指差す母親。

だが、故人の様子は髪を真っ赤に染めて、別人のようになっている。

母 「あんた何してんの!」

大 悟「一」

母 「全然違う…やり直して!」

母親の後ろにいる父親が大きなため息をつく。

大 悟「はい……」

戸惑っている大悟。

父親が怒声を上げる。

父 「今さら何言ってんだ。オメエがちゃんと育てねえから、こげなことになってしまったんだろうや!」

責め立てられた母親、いたたまれなくなり、娘の遺体にすがりついて泣く。

そのとき、参列していた少年たちのうちの一人が、

少年B「……そういう言い方はねえじゃないですか」

父 「なんだと!？」

少年B「ミユキのこと、ちゃんと見てなかったのは、あんたも同じじゃないですか!」

父 「おめえ、何様だ!」

父親、立ち上がり、

父 「おめえだがバイクでひっぱり回して!」

少年Bに向かってとび蹴りをしようとして、倒れる。

父 「おめえだけ生き残って! 恥ずかしくねえのか!？」

父親、少年Bをぼこぼこ殴る。

おじさん「やめれ!」

大 悟「普通って何だよ？ 誰でも必ず死ぬだろ。オレだって死ぬし、君だって死ぬ。死そのものが普通なんだよ」

美 香「理屈はいいから。今すぐ辞めて。お願い」

大 悟「……」

美 香「私、今まで何も言わなかったよね。大ちゃんがチェロ辞めたいって言った時も、田舎に戻りたいって言った時も、笑ってついてきたじゃない。そりゃ……悲しかったんだよ、本当は。でも……あなたが好きだから……」

大 悟「……」

美 香「だから、今度だけは、お願い。 私の言うこと聞いて！」

大 悟「……」

美 香「……」

大 悟「……嫌だ、って言ったら？」

美 香「……一生の仕事に出来るの？」

大 悟「……」

美香、大きなため息をつき、

美 香「実家に帰る」

大 悟「……」

美 香「仕事辞めたら迎えに来て」

大 悟「美香！」

大悟、美香を後ろから抱きしめようとするが……

美 香「触らないで！」

大 悟「ちょっと……」

美 香「穢らわしい！」

大 悟「=」

美 香「……」

美香の目から涙が溢れる。

美香、そのまま部屋を出て行く。

大 悟「……」

す 無 人 駅

田園風景の真ん中にポツンとある鄙びた無人駅。
スーツケースを手にした美香が電車を待っている。
入線してくる電車。

大 悟「一」

そこへ、見覚えのある初老の男性が通りかかる。
銭湯で詰め将棋をしていた平田だ。
大悟に声をかける平田。

平 田「鮭、ですか？」

大 悟「？(振り返り)あ……(会釈をする)ええ」

平田も大悟の隣に来て、川を覗き込む。

大 悟「あ、今、ちょうどあの、石のところ……(と指をさして教える)あそこ」

平 田「おお、がんばれ、がんばれ」

二人、必死で川をのぼる鮭を見つめている。
また新たに一匹、上流で命を使い果たした鮭が流れていく。

大 悟「何か切ないですね、死ぬためにのぼるなんて。どうせ死ぬなら、何もあんなに苦労しなくても」

平 田「帰ってえんでしょうのう、生まれ故郷に……」

平田はそれだけ言い残して去って行く。

大 悟「……」

× × ×

46A

土手に腰掛けている大悟。
佐々木の運転する車が近づき、クラクションが鳴る。
ハッと大悟。車を見て慌てて立ち上がる。
佐々木、運転席の窓から顔を出して、

佐々木「飯食いに行こう、飯」

大 悟「……」

佐々木、車から降りる。

佐々木「社長命令だ」

佐々木、腕時計を見て、腕から外す。

大 悟「偶然ですか？」

佐々木「ああ？」

大 悟「ここを通りかかったのは」

佐々木「……運命だな」

大 悟「そんなこと……」

佐々木、結婚指輪も外して、

佐々木「君の天職だ、この仕事は」

助手席に向かう。
大 悟「いい加減なこと、言わないでください」
佐々木、無言のまま、助手席に乗り込んで待つ。
大 悟「……」

47 山麓の農家・外(富樫家)

玄関前。
大佛堂の大中が、喪主とその義弟に謝っている。
大 中「すみません、すみません、申し訳ねえのう」
腕時計を見る大中、前方に気づき、
大 中「おお!」
坂道を駆け下りる。
佐々木と大悟の乗ったライトバンが到着する。
駆け寄る大中、
大 中「怒ってるよ、怒ってるよ」
大中、ドアを開けて、
大 中「頼むよ佐々木さん!」
佐々木「すみません」
× × ×
玄関前。
喪主と義弟が待っている。
佐々木と大悟、二人に軽く会釈して急いで中に入ろうとする。
喪 主「遅っせー!」
立ち止まる佐々木と大悟。
喪 主「5分も過ぎてんだぞ、5分も!」
佐々木「申し訳ありません」
カラス 喪 主「おめえら、死んだ人間で食ってんだろ」
義 弟「義兄さん」
喪 主「早くしろ」
家の中に入って行く喪主。
佐々木、義弟に、
佐々木「本当、申し訳ありません」
義弟、二人を中へとうながす。
佐々木と大悟、中へ。

大 悟「あれ? 美香?」

63 同・二階

大悟、居間の扉を開けると、美香が正座をしている。
大 悟「美香……」
美香、大悟を睨みつける。
大 悟「どうしたんだよ?」
美 香「ー」

× × ×

63A

以前制作したビデオの映像。
裸で寝かされた大悟をモデルにして、佐々木が解説しながら
実演する。
佐々木「ご遺族の皆様にも痛々しく見えないよう、行わせていただいております」
一画面転換一
半身起こされた状態の大悟。
佐々木「まれに、肛門にお詰めする場合があります。このように脱脂綿を丸め、
肛門の、奥まで、押し込み、体液の流出を防ぎます」
あまりにも情けない大悟の姿が映し出されている。
ビデオのストップボタンが押され、画面が消える。
大悟と美香のあいだに緊張感のある時間が流れる。
美 香「何なの、コレ」
大 悟「机の中、勝手に見たんだ?」
美 香「そんな問題じゃないでしょう」
大 悟「……これは、たまたまモデルになっただけで」
美 香「仕事の内容も、全部調べた」
大 悟「……だから、何?」
美 香「何で言ってくれなかったの?」
大 悟「言うて反対するだろ」
美 香「当たり前でしょ。こんな仕事してるなんて……。恥ずかしいと思わな
いの?」
大 悟「どうして恥ずかしいの? 死んだ人を毎日触るから?」
美 香「普通の仕事を、して欲しいだけ」

M14 : 23"

第五卷

6 商店街

除雪作業が行われている寂れた商店街を大悟が物思いに耽りながら歩いている。

山下と妻の理恵、娘の詩織とばったり遭遇する。

大悟「おお、山下！」

大悟、理恵に軽く会釈、

理恵「(山下に)友達？」

山下「……」

詩織「(微笑みながら大悟に)こんにちは！」

大悟「こんにちは」

山下「挨拶とかしなくていい！」

大悟「……」

理恵「あなた!？」

山下「先行ってろ、すぐ行くから」

理恵と詩織、戸惑いながら先に歩いていく。

山下、大悟に近づいて、

山下「噂になってるぞ」

大悟「何が？」

山下「どうでもいいんだども、もっとマシな仕事さ就けや」

大悟「……」

大悟に背を向けて去って行く山下。

除雪機械音

山下「(妻と娘に)行くぞ おい、行こ」

詩織の手を引いてさっさと行く山下。

理恵、大悟に軽く会釈して、山下についていく。

残された大悟。

大悟「……」

8 大悟の自宅・一階

夜、大悟が帰って来る。

大悟「ただいま」

美香がいる気配はするが、何も返答はない。

第四卷

48 同・内

佐々木、遺族に一礼。
合掌して、故人の顔にかかっている白布を取る。
横たわる故人は〇代の女性。
その顔はやつれ果てており、哀れな様子である。
佐々木、顔をじっとみつめ、祭壇の方を見る。

大 悟「？」

大悟、見ると祭壇には故人の元気だった時分の写真が遺影として飾ってある。
佐々木、故人に向き直り綿花を小分けに切って含み綿を始める。

喪 主「一」

うなだれる喪主。

× × ×

故人が着ている浴衣を引き抜き、再びかける一連の動作。
真剣なまなざしで見ている大悟。

× × ×

手を丁寧に拭く佐々木。
その愛情がこもった手の動きを見つめる遺族たちと大悟。

× × ×

仏衣を着付ける佐々木。
その見事な手さばき。
大悟は、ただひたすら佐々木の動きを見つめている。

× × ×

鳥

故人の両手を胸元に重ねる佐々木。
暖かく故人を見つめる佐々木の瞳。

喪 主「一」

× × ×

故人の顔に優しくローションを塗る佐々木。
じっと様子を見ている大悟。
やつれていた顔がふっくらとし、最初のような悲壮感はなくなっている。

この人にやってもらいたいと思った。なんかね、全然違うのね、あの
人」

大 悟「一」

上 村「で、ココ」

大悟、席の方に戻って、

大 悟「人の運命って面白いですよ。どこでどうなるか、分からない」
紅茶を飲む。

上 村「そうねえ」

大 悟「おいしいです」

微笑む上村。

大 悟「ってきます」
美香は大悟を普段通りに見送る。
美 香「……」

8 NKエージェント・内

上村が暖かい紅茶を淹れている。
そこへ大悟が目を真っ赤に腫らして入社してくる。
大 悟「おはようございます」
上 村「おはよう。タバはご苦労さま。警察の人、感心してたわよ。若いのに、
って」
大 悟「ああ、もう、無我夢中でやりました」
上 村「そう〜。冷えるねー、今日」
大 悟「ええ」
大悟、買った替えのシャツを袋から出す。
上村、紅茶を入れて大悟のところへ持ってくる。
上 村「はい」
大 悟「!あ、ありがとうございます」
上 村「目真っ赤。眠れなかったんだ」
大 悟「ええ……」
上 村「この仕事精神的に引きずるからね」
ソファに戻る上村。
大悟、シャツをデスクの引き出しにしまって、
鳥鳴き声 大 悟「上村さんは、どうしてこの仕事に就いたんですか？」
上 村「ん？」
大悟、カップを手に取り、
大 悟「いただきます」
上 村「ん〜、若い頃に色々あってね、あっちにいられなくなったの」
大 悟「ええ？」
上 村「帯広」
大 悟「…」
上 村「どの仕事も長続きしなくてね、たまたま流れ着いたのがこっちのスナ
ック」
大悟、カップを置いてストーブの火に当たる。
上 村「でもね、そのママさん、脳溢血で、いきなり死んじゃったの。で、社
長が来てね、私ね、そんなとき納棺初めて見たの。あー、私、死んだら、

祭壇の写真を見る喪主。
生前の、生き生きとした妻の顔。

喪 主「一」

化粧を施している佐々木。
じっと見つめている大悟。
やがて、佐々木が喪主に尋ねる。

佐々木「奥様がお使いになっていた、口紅、ございますか？」

喪 主「一え？」

と、娘が立ち上がり部屋を出てゆく。

大 悟「一」

× × ×

娘が佐々木に口紅を手渡す。

丁寧に口紅を塗っていく佐々木。

大悟M「冷たくなった人間をよみがえらせ、永遠の美を授ける。それは、冷静
であり、正確であり、そして何より優しい愛情に満ちている。別れの場
に立ち会い、故人をおくる。静謐で、全ての行いがとても、」

美しく復元された故人の顔を見つめ感慨深い遺族たち。

娘 「お母さん!…お母さん…お母さん…」

大 悟「……」

× × ×

大悟M「美しいものに思えた」

遺族たちが故人を棺に入れている。

佐々木「ありがとうございました」

一人、呆然としている喪主。

× × ×

合掌している佐々木。

佐々木「では、おフタを閉じさせていただきます」

親戚の女性「なおみちゃん……」

佐々木がフタを閉めようとすると、喪主が突然立ち上がり、棺
の横に跪く。

喪 主「……なおみ……」

と、喪主が突然ボロボロと泣き始める。

喪 主「なおみー!」

喪主、美しい故人の顔に触れ、号泣。

最後の別れをする。

佐々木、存分に別れをさせる為フタを持ったまま待機する。

佐々木が喪主を見つめる顔は限りなく優しい。
涙をこらえている大悟。

49 同・外

すっかり暗くなっている。
出て来る佐々木と大悟。
一礼して歩き出すと、追いかけてきた喪主に呼びとめらる。

喪主「あの～！」

立ち止まる二人。
喪主が来て、

喪主「今日は、申し訳ありませんでした」

佐々木「いえ、こちらのほうこそ……」

喪主「あのこれ、良かったら持ってってください」

と、新聞紙に包まれたものを渡す。

佐々木「ありがとうございます」

喪主「あいつ……今までで、一番きれいでした。本当に、ありがとうございました」

喪主、深々と頭を下げ、戻っていく。

大悟「……」

佐々木「……」

50 停った車の中

大悟がトランクを閉めて、運転席に乗り込む。
助手席の佐々木、開いた新聞紙の包みをダッシュボードに置く。
干し柿だ。
干し柿をかじる佐々木。
腕時計をつけながら微笑む大悟。
大悟の表情に気付いた佐々木が、

佐々木「ん？」

大悟

「あ、いや……」

佐々木、干し柿を大悟に差し出す。

大悟、もらった干し柿をかじる。

大悟、何気なくレコードを見る。
美香は暖かいまなざしで大悟を見ている。
悲しい旋律を奏でながら、レコードは回り続けている。

56 雪の庄内平野(夜)

大悟の自宅周辺。
闇の中に白い雪の平野が浮かび上がっている。

57 大悟の自宅・階段～一階

大悟、携帯電話で話ながら階段を下りてくる。

上村の声「いい？」

大悟「はい、どうぞ」

上村の声「すぐ行ってほしいの」

大悟「え、今からですか？」

上村の声「そう、駅前のスターホテルで首吊りなのよ」

大悟「…社、社長は？」

上村の声「それがねえ、社長は別件で出ちゃったばかりなのよ。今日は一人をお願い！ いい？」

大悟「……わかりました…はい」

携帯を切って階段を上がる。

58 同・二階

大悟、洋服を着替え、厚めのコートを手を持って、こっそりと部屋を出る。
その瞬間、美香の臉が開く。

美香「一」

風音 同・外

翌朝、いつも通りに出社していく大悟。

美香「いってらっしゃい」

55A

窓の外、雪がしんと降っている。
× × ×

55B

大悟、窓辺に座って、父親からもらった石を何となく弄びながら、酒を飲んでいる。
美香は棚にあるレコードを物色している。
クラシック音楽のレコードばかりだ。

美 香「お母さん、こんなの聴いてたんだ」
大 悟「全部、オヤジでしょ」
美 香「あ、そっか、ここって最初はお父さんの喫茶店だったんだよね？」
大 悟「思い出したくもない……って言うより、覚えてないんだよね、オヤジの顔！」
美 香「会いたい、って思わない？」
大 悟「会いたくない……でも、……もし会ったら……」
美 香「会ったら？」
大 悟「……ぶん殴る」
大悟、テーブルの上に石を転がす。
美 香「……」
美香、レコードに針を落とす。
レコードノイズと共に、前奏のピアノの曲が聴こえて来る。
美香、ジャケットを手に大悟の前に座る。
曲にチェロの演奏が加わり、メロディを奏でる。
大 悟「!……」
大悟、ジャケットを手にとり、
大 悟「親父のお気に入りだ」
自分がいつも弾いている曲は、父親が好きな曲でもあった。
美 香「私、思うんだけど……(石を手にして)大ちゃんのお母さんて、ずっとお父さんのこと好きだったんじゃないかな？」
大 悟「(ふっと笑って)まさか」
美 香「でなきゃ、レコード全部捨ててるって！」
大 悟「ー」
美 香「こんなにきれいに整理してない、って！」
大 悟「……」

不思議な充実感に包まれている。

55 銭湯・内

番台にいるツヤ子。
女湯の扉が開く。

ツヤ子「いらっしゃい」
女湯の入り口には美香がいる。
美 香「こんばんは」
ツヤ子「?(軽く会釈)」
大悟の声「こんばんは」
ツヤ子、男湯の入り口を見ると、大悟が立っている。
ツヤ子「あいや〜、まさか」
大 悟「はい、うちの嫁です」
ツヤ子「あいや〜」
美 香「はじめまして」
ツヤ子「めんこいっ子、もらって」
大 悟「いやあ、そんげなことねえてば」
ツヤ子「(美香に)ゆっくり浸かって、温まっていけの」
美 香「はい。ありがとうございます」

56 同・内

湯船に浸かっている平田。

大悟の声「こんばんは」
ふと横を見ると、大悟がいる。
平 田「ああ、どうも」
大 悟「いつもこちらへ？」
平 田「もう15年以上通ってはなの」
大 悟「はあ……では、会ってたかも…」
話が續かない。
大 悟「こういう熱い風呂もいいもんですの」
平 田「ここは、地下水を汲んで薪で沸かすからの、お湯、柔らかいのやの
だはで、熱くても、チクチクはしねえ」
大 悟「なるほどのう」

平 田「日本一の、風呂屋だのう」

大 悟「ほう～」

平 田「ははは…」

× × ×

先に美香があがり、脱衣所のベンチに座って支度している。

客 「ツヤ子さん、せば、またのう」

ツヤ子「ありがとう。またのう」

ツヤ子、客を見送り、重いストーブの灯油を運んでくる。

年老いた体に鞭を打ちながら働くその姿を見て、美香は心を痛める。

美 香「お手伝いしましょうか？」

ツヤ子「お客さんに手伝ってもらったらバチ当たる」

ツヤ子、ストーブに灯油を入れる。

美 香「全部、お一人で？」

ツヤ子「ああ、ずーっと前にじじちゃん死んだからの。役所勤めの息子は、ここさ売ってマンション建てろって言うけど。ここなくなったら、今のお客さん、困るから。私が元気なうちは」

美 香「そんな、まだまだ!」

ツヤ子、作業の手を止め、美香を見て言う。

ツヤ子「支えてあげての」

美 香「え？」

ツヤ子「大ちゃん、優しい子だから。全部自分で引き受けてしまうのよ。両親が別れた時も、母親の前では、絶対に泣かなかったの。男湯で、一人になった時泣くのよ。ちっちゃい体で、肩震わせて……」

美 香「……」

ツヤ子「そういうところあるから、分かってあげての」

美香、頷く。

美 香「一はい」

× × ×

平田、牛乳を飲む。

ツヤ子、女湯から来て、

ツヤ子「今日のお湯は？」

平 田「う～ん、まあまあだの」

ツヤ子「もう～」

平田、ツヤ子が襟元につけているスカーフを指差し、

平 田「お、ええのう。似合っとるの」

ツヤ子「へへ～」

微笑み合う二人。

す 同 ・ 外

大悟と美香、出て来る。

外はすっかり雪景色になっている。

美 香「うわっ、真っ白!」

大 悟「明日から冷えるのう 貸し」

大悟、美香の荷物を持つ。

美 香「あ、ありがと。ね、一杯だけ飲んでかない？」

大 悟「そうだ! いい店あんのやの」

美 香「ホント?行く行く!」

大 悟「行く行く」

美 香「行く行く?」

大 悟「行ご行ご」

大悟と美香、駆け出す。

美 香「行ご行ご」

55 大悟の自宅・一階

寒々しい店内の片隅で石油ストーブが燃えている。

ウイスキーの入ったグラスに熱い湯が注がれると、きれいな琥珀色の酒から湯気がたちのぼる。

グラスをぶつけた音が、寂しい店内に温かく響く。

美 香「ん～、おいしい!」

大 悟「久しぶりだな、こういう風に飲むの」

美 香「(笑って)何か、演歌っぽい?」

大 悟「んだ～んだ～」

二人、笑う。

× × ×